



逆行

Back-light

逆行

冷蔵庫の扉を開くと、バナナの奥に白い壁が見えた。その時に僕が仕事を休むことは決定されていた。吐息のような冷氣混じりのぼんやりとした光に顔を当てられて、寝覚めの頭は少しづつ熱気を奪われ、うなじは影で黒く隠された。髪を伸ばしたかったので、ちょうど良かった、と思いつながら振り返ったので、影はうなじから顔へと移動した。去り際に冷蔵庫を閉めて、光が途切れ、代わりに日差しが簾の隙間から入ってきた。海中の光のように自由自在に移動する影にまわりつかれながら、リュックサックに荷物を詰め込みはじめた。懐中電灯に手を伸ばした時、横に置いてあった置き時計に視線を吸い寄せられた。それらを無言で伏せた。

食卓の上に置いてあった携帯電話がずっと鳴っていた。それに気づかなかったのは故意なのか、素面なのか、底の見えない議論を頭の片隅で握り潰した。次に財布の整理をした。いらぬレシートを数枚引っ張り出して、これまた握り潰してゴミ箱に投げ入れた。惨めな姿になったレシートは朝日を受けて、節々に影を作った。それを眺める僕の横顔にも影はできていた。その時に僕は一体いくつものものを傍観しているのか、わからないまま突っ立っているのだ。途切れていた着信音は再び鳴り始める。

リュックサックがちょうどいい具合に膨らんだタイミングで荷造りは終わった。数年前に履いていた運動靴を下駄箱から取り出して、軽く磨いた。かなり履き続けられ、すり減り、薄汚れているその靴は小汚い僕の足に良く馴染んだ。扉の小さな曇りガラスから光が差し込んで、霞んだ光が僕の髪を照らしている。温もりすらも感じられないまま、僕は淡々と靴紐を結んでいた。立ち上がると足の自由さに少し驚いた。ドアノブに手をかけると重みと眩暈を感じた。小さな玄関の中では、誰も後押しをしてくれやしないという恐れが次に浮かんだ。家の扉が防音扉より厚く、金庫よりも頑強な気がした。そのくせに子供のおもちゃよりも単調でもある。もはや僕の背には後押しどころか、追い討ちのように着信音が鳴っており、僕自身が落とす影は後ろにしか付いて行かない。しかしそれを感じられるだけで、僕は既に前進している。扉を開いて歩き始めると、直に日光を受けた。僕の顔はついに純粹な光に晒される。もちろん、その時うなじは黒く浸されている。

人混みに揉まれて改札口を目指す。まるで他人に生かされているようだったけれど、悪い気分はしなかった。前を歩く女性の美しいうなじを見ながら考えていた。皆がどこを見ながら歩いているのか、僕には知る由もないが、きっと僕とは違う世界を見ているのだろうと羨んだ。それから僕は規則的に並ぶ頭上の蛍光灯の明かりに視線を向ける。改札を通り過ぎれ

ば流れは分岐するだろう。多くの人は都心を目指して階段を昇る。僕はそれに逆流するように、反対側のホームへの階段を昇る。二度と合流することはない。

適当な駅で電車を降りて、バスの切符を買った。停留所で待つ人は誰一人いなかった。僕が旅に出る理由は多分存在せず、強いて挙げるとすれば、それは冷蔵庫の中身が減ってきたからであり、ずっと電話が鳴りっぱなしだったからでもある。なんにせよ、誰かが理由を求めようと、僕はそれを必要としていなかった。かといってそこに扉のように強い意思はない。

蝉の声がうるさく、近くの木にとまっているらしかったが、探す気にはなれなかった。しばらくして女性が僕の横に並んだ。おそらく乳離れしていないであろう娘と、帽子をかぶった五歳ぐらいの息子を連れていた。娘は親指を口にくわえながら、母親の肩越しにこちらを見つめていた。僕も見つめ返した。二人とも違うものを見ていることは明白だが、果たして本当に見ているものは違うのだろうか？本人に聞いてみようかと思っただが、不審者だと言われたらたまらないので、そのまま二人でにらめっこを続けた。バスが来るまでに、それ以上人が増えることはなかった。

バスに乗っても、蝉の鳴き声は途絶えなかったが、運転手の真っ白な手袋を見ると心持ち涼しくなった。僕は運転手に背を向ける形で、向かい合わせになっている二人席に座った。一番後ろの席に女性は二人の子供と一緒に座った。運転手は出発まであと五分ある、と言った。彼の白い手袋のように、無機質なアナウンスだった。暇になった僕は、窓に頭を預けて、外の景色を見る。気がおかしくなるぐらい天気良かった。手袋に負けないぐらいの白さの雲が、水色の背景に違和感を覚えるぐらい浮いていた。

やがてバスのドアは閉まり、蝉の声は遮断される。頭に向けられた冷房の風に冷やされながら、未だに視線を動かさずにいた。外の景観がゆっくりと動き始めて、じわじわと加速していった。

僕の視界からすると、バスは後ろ向きで進んでいった。僕を境目にして、窓の外の風景は出発し、遠ざかっていく。ところで二人の子供たちはといえば、男の子は進行方向に向かって座っており、つまり僕と顔を合わせられる方向を向いていた。僕と彼とでは見ている風景が違うのだろう。彼とつての窓の風景は、あちらから向かってくるものであり、自分を通り過ぎると消え失せてしまうものなのだ。彼は振り向いても、同じものを見ることはできない。そこでは母親と、壁のように立ちはだかる座席が風景を遮ってしまった。結局、彼には風景を見るためには前を向くことしかできない。途端に不安が湧いてきた。僕は逆に

行き先を見ることができない。知らない間に変な場所に連れて行かれても気づかない。僕はずっと後ろ歩きを続けているから、文句を言うこともできない。男の子と母親は前を向いて、僕は後ろを向いていた。しかし、女の子も後ろを向いていた。母親に抱かれて、後ろしか向けない女の子の視界は、この瞬間、世界で一番僕に近い。しかし同じ方向を向くもの同士、目を合わせられないのは皮肉なもんだ、と一人で勝手に哀愁に浸っていた。

車窓から見える風景は次第に建物が減り、木々が増えていった。カーブに差し掛かると隣に伸びる車道が放物線状に曲がり、僕が目で追いかけられる限界の一点に向かっていった。蝉の声一つ聞こえない、冷房の聞いたバスの車内で、僕はただそれを見つめる。風景は流れるように変わっていき、視界に入るものも様々だった。小さな蕎麦屋、畑、郵便ポスト、駐車している大型トラック……。等間隔に並ぶ明かりのついていない街灯の影が、順繰りにバスの車内に入っては出て、また新しい影が入っては出ていった。僕の横顔もそれに応じて表情を変えた。川の流れをせき止める石になった気分だ。街灯もいつかは風景に流されて、途切れてしまうはずだ。流動的に変化する、一つの風景をずっと見ていた。後ろに鎮座する空だけが、僕がどこまで行っても形を変えようとしなかった。重みを感じるほどだった。

あの雲も、次第に加速するだろう、と考えた。もうじきここにも台風が通ってくる。動く心配のないあの雲も、風に飲まれてバスよりも速く僕を抜き去って何処かへ行くのだろう。数時間後の車窓の風景を思った。雲が去ってしまえば、風景も変わるはずだ。それまでは、僕と雲は一緒に動かずにただそこにいるだけでいい。

ふと家に置いていった携帯電話を思い出した。あの電話はまだなりつづけているのだろうか？あの家も台風の雨に覆われ、着信音さえもかき消されてしまうだろう。そう考えると少し気が楽になった。再び僕が旅に出る理由を考えた。それは運転手の手袋が白いからで、蝉の声が聞こえなくなったからでもある。そんな理由も、誰も思いつきやしないはずだ。

かすかに聞こえる冷房の音を聞きながら、僕は前後ろを隔てる境目ではなく、まさに石のような一点なのだと噛んで食べるように理解した。表も裏も存在せず、ただ僕は光に照らされて、影を落とすだけだった。違う方向を向く男の子も、母親も、きつとただ光を浴びているだけなのだ。不安を押しつぶすように、そう考えることにした。後ろに座る三人は眠り始めて、バスの中で目を覚ましているのは僕と運転手だけになった。運転手は前に進み続けていた。僕はそれに流され続ける。しかし一歩も動かない。家を出る時よりも、雲のような重さを持って、僕はそこに止まり続けている。

玄関よりも開けているバスの車内で、僕は未だに独りだった。車窓から射す光に当てられながら、僕の半身はバスの車内と同化していった。やがて白い光と黒い影しか区別がつかなくなっても、僕は車窓を眺め続けている。